法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-07-28

18世紀後半の知の形成と伝達における言語とイメージの相互作用

濱中, 春 / HAMANAKA, Haru

(雑誌名 / Journal or Publication Title)
科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書
(開始ページ / Start Page)
1
(終了ページ / End Page)
4
(発行年 / Year)
2013-05

Hosei University Repository

様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年５月２４日現在

機関番号：３２６７５
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2010～2012
課題番号：２２５２０３３０

研究課題名（和文）　１８世紀後半の知の形成と伝達における言語とイメージの相互作用

研究課題名（英文）　Interaction between word and image in the formation and transmission of the knowledge in the second half of the 18th century

研究代表者
濱中　春（HAMANAKA HARU）
法政大学・社会学部・准教授
研究者番号：００２９４３５６

研究成果の概要（和文）：18 世紀後半のドイツの物理学者・著述家ゲオルク・クリストフ・リヒテンベルク(1742-99)の諸活動（美術史、観相学、自然科学、スケッチ、雑誌メディア）を通して、この時代の知の形成と伝達における言語とイメージの相互作用を考察した。近世から近代への移行期のヨーロッパにおいては多くの領域で知の枠組みの変化や転換が起こったが、それは言語とイメージの機能および相互関係にみられる多様性と変動の中で展開したものであることが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：This study investigated the interaction between word and image in the formation and transmission of the knowledge in the second half of the 18th century through the activities of Georg Christoph Lichtenberg (1742-99), the German natural philosopher and writer. Following fields of activities with which Lichtenberg occupied himself were investigated: history of art, physiognomy, natural science, sketches and periodicals. It was pointed out that the paradigm shift of the knowledge in the transition from the premodern to the modern era in the Europa took place in the variety and the changes of the function of word and image and of their interaction.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	700,000	210,000	910,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
2012 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	1,700,000	510,000	2,210,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学（英文学を除く）
キーワード：独文学、美術史、視覚文化、18 世紀、リヒテンベルク

１．研究開始当初の背景

1980 年代以降、欧米で美術史学から発展してきた視覚文化研究は、その対象を狭義の芸術作品から視覚文化全般へと著しく拡大し、その結果、多様なイメージの世界が文化研究の前に開かれた。その中で近年、従来のようにイメージを知の対象とみなすにとどまらず、それ自体が知を形成する力を持つものとしてのイメージという側面にも注意が向けられるようになってきた。同時に、視覚文化研究では、啓蒙思想や技術の進歩によって知の視覚化が進んだ時代である 18 世紀の重要性も指摘されている。しかし、文学・言語研究の立場からみると、そこには問題点も認め

Hosei University Repository

られた。

第一に、視覚文化研究では、言語論的転回以降の西欧思想における言語偏重主義に対してイメージの価値を復権するという趣旨から、しばしば言語がイメージの対立項として持ち出され、イメージの言語に対する優位性や言語への還元不可能性を強調することで、イメージに固有の特性が説明される傾向がある。しかし、これまでイメージによる知の研究においてとりあげられている事例の大半では、イメージはそれ単独ではなく、言語とともに作用してはじめて知がかたちづくられている。視覚文化研究の成果をふまえつつ、知の形成や伝達における言語とイメージの相関関係について再考する必要があると思われた。

第二に、イメージによる知の研究では、これまで主に自然科学におけるイメージングがとりあげられているが、自然科学は近代的な知の重要な構成要素であるにせよ、そのすべてではない。特に、18 世紀は、近代的な自然科学とその諸領域が確立する以前の時代であるため、そこで自然科学だけを特権的に取り扱うことは適切ではないと考えられた。

以上のような問題をふまえ、18 世紀における知のあり方を総合的にとらえる手がかりとして、本研究では、18 世紀後半のドイツの物理学者であり著述家であったゲオルク・クリストフ・リヒテンベルク(1742-99)に注目した。リヒテンベルクは自然科学と人文科学の諸領域に横断的にかかわり、実験物理学、美術史学、観相学、雑誌、書簡文化といういずれも 18 紀後半に発展した知的活動に携わっていたが、そこにはつねに言語とイメージの交錯がみられる。リヒテンベルクの諸活動は、言語とイメージの相互作用という観点から 18 世紀の知の形成と伝達の過程にアプローチする有効な手がかりになると思われた。

２．研究の目的

本研究は、18 世紀後半のヨーロッパにおける近代的な知の形成と伝達のプロセスの中で、言語と視覚的イメージの相互・共同作用がはたした役割を解明することを目的とする。具体的には、当時のドイツの物理学者であり著述家であったゲオルク・クリストフ・リヒテンベルクの領域横断的な活動を手がかりとして、18 世紀後半のドイツ語圏を中心に、美術史学、観相学、自然科学、スケッチ、雑誌メディアという５つの主題圏における言語とイメージの機能および相互関係を明らかにする。

学術的な位置づけとしては、本研究は文学・言語研究と視覚文化研究の双方の成果や方法に基づきながら二つの研究分野を発展的に架橋することを目指すものである。

３．研究の方法

本研究では、リヒテンベルクの活動にそくして以下の５つの主題圏を設定し、それぞれについて具体的な研究対象を選定した。そして、一次資料・二次文献の調査・収集と精読、およびそれらにもとづく考察を主な方法として、年度ごとに１～２個の主題圏に順次、重点を置いて研究を進めた。

（１）美術史学：ホガース解説
（２）観相学：『世界図絵』
（３）自然科学：リヒテンベルク図形
（４）スケッチ：書簡と覚え書
（５）雑誌メディア：『ゲッティンゲン懐中暦』

４．研究成果

（１）美術史学

18 世紀にイギリスを中心としてヨーロッパで書かれたさまざまなホガース解説を比較・考察し、その中におけるリヒテンベルクのホガース解説（1794-99）の位置や特徴を明らかにした。当時のホガース解説は、画家の伝記・絵の解説・カタログという三つの要素から構成されており、伝記とカタログが大きな比重をしめるものが多いのにたいして、リヒテンベルクのホガース解説は絵の解説のみからなっている。ここには造形芸術作品を言語化する際に、伝記やカタログという作品の外的な情報を含むテクストが排除されてゆき、作品史としての美術史記述の確立へと向かう流れが見いだされる。

（２）観相学

リヒテンベルクがラーヴァーターの観相学にたいする対案として構想した『世界図絵』（1780・1785）における言葉と図像の関係を、コメニウスの『世界図絵』（1658）との比較を通して考察した。両者は「世界という書物」という中世以来のメタファーの伝統のなかで、フーコーが『言葉と物』で指摘しているような、ヨーロッパの近世から近代への移行期に生じた認識論的な変動をめぐっておこなわれた二つの取り組みととらえられる。コメニウスはその『世界図絵』を世界という書物のひな形と位置づけ、言語と世界のあいだに開き始めた裂け目を前にして、言葉と図像のあいだに対応関係を設けることによってそれを克服しようとした。それにたいしてリヒテンベルクの『世界図絵』は、世界という書物からの抜き書き集として構想されており、言語と世界との乖離を前提として、言葉と図像が相互に対応関係をもたないことによって、世界との一時的なつながりを保ち続ける試みであるといえる。

（３）自然科学

Hosei University Repository

リヒテンベルクが 1777 年に発見した電気図形（放電によって生じるリヒテンベルク図形）をめぐって 1800 年前後におこなわれた研究について、リヒテンベルクの論文や覚え書と同時代の一次資料にもとづき、記述、図版、転写、メディア、記号という５つの観点から考察した。リヒテンベルク図形の同時代の受容史については、これまでその一部分しか知られていなかったが、本研究を通して、1800 年前後にはこの現象は物理学教科書や大衆科学において広く受容されていたことが明らかになった。その中でリヒテンベルク図形は、同時代の博物学、天文学、気象学、化学、色彩論、言語論、版画術、写真術などさまざまな技術・学問分野と、イメージの知覚、非媒介的な図像化、言語への転化、メディア化、記号化というテーマを共有していた。リヒテンベルク図形は電気によって生み出され、粉末でできた図形という特殊なイメージであるからこそ、近世的な「自然にかんする知」から近代的な「自然科学」への転換の途上にあった知の諸問題を、言語とイメージのあいだに成立した関係の諸相において経験したということができる。

（４）スケッチ

ゲッティンゲン大学図書館に所蔵されているリヒテンベルクの書簡、日記、覚え書の手稿に描きこまれたスケッチを調査し、言語テクストとの関係を考察した。リヒテンベルクのスケッチは、その表現形式（ペンによる小さな線描）と位置（テクスト本文の中や周縁への埋め込み）によって、文字テクストのなかで非常に識別しにくいこと、つまりテクストとイメージの境界が流動的であることが指摘できる。また、とくに自然科学にかんするスケッチのなかには、認識を線と点の種類を利用して端的に表し、さらに図像メディアの限界を言語で補うという、テクストとイメージの幾重もの相互関係が見出され、スケッチは文字言語と並び、それと相補的に知の生成に関与する媒体となっている。

（５）雑誌メディア

リヒテンベルクが 1778 年から 99 年までの間、編集に携わった『ゲッティンゲン懐中暦』に掲載されている挿絵を調査し、それらのジャンルおよび言語テクストとの関係を考察した。この雑誌にみられる挿絵のうちで、扉絵とモードのカタログは、図像のみによってメッセージを発しているのに対して、毎月の暦にそえられた銅版画とホガースの銅版画は、言語テクストと組み合わされることによって意味をなすものである。また、毎月の銅版画には、オリジナルの道徳的な主題をリヒテンベルクが画家ホドヴィエツキに提案し、できあがった絵に解説を添えたものと、シェイクスピアの演劇や歴史上の名場面のように既存の物語を図像化したものとがあり、ホガースの銅版画は、リヒテンベルクが執筆した解説テクストに、銅版画の一部を抜粋して配列し直したものである。このように、18 世紀後半に娯楽と教養を目的として広く読まれた雑誌においては、図像とテクストとは単純な一対一対応の関係にあるのではなく、一冊の雑誌のなかで図像とテクストのあいだには複数の次元の関係が存在して、情報が構成され、発信されている。逆に言えば、この時代には雑誌というメディアを通して図像、テクスト、そして両者が織りなす多様な関係を読み解くリテラシーが普及しつつあったということでもある。

（６）まとめ

本研究では、リヒテンベルクの諸活動という事例を通して、近世から近代への移行期のヨーロッパにおける知の内実とその変容の一端が明らかになった。そこでは言語とイメージはいずれも知の形成と伝達に根本的にかかわり、またそのプロセスを担っているが、両者の機能および相互関係はきわめて多様かつ可変的である。先に述べた５つの主題圏にそくしてまとめれば、（１）イメージを記述し説明する言語のモードの変化（美術史）、（２）イメージと言語の関係を通した認識の枠組みの構築とその変化（観相学）、（３）イメージそのものの知覚からその記号化にいたるまでの諸相の展開（自然科学）、（４）言語とイメージの融合と相補関係（スケッチ）、（５）一つのメディア媒体における言語とイメージの多次元的な関係の併存（雑誌）という５つの論点があげられる。このように言語とイメージの機能および相互関係にみられる多様性と変動は、18 世紀末から 19 世紀初頭にかけてのヨーロッパにおいてさまざまな分野で起こった知の枠組みの転換にともなうものであると同時に、これらの転換そのものの一部でもあるということができる。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計６件）

① 濱中春、„Diese neue Art der Druckkunst“. Die Lichtenbergischen Figuren und die Druckgrafik im 18. Jahrhundert、Lichtenberg-Jahrbuch 2012、査読有、2013、印刷中

② 濱中春、+E und -E. Die Lichtenbergischen Figuren als Zeichen der Elektrizität、社会志林、査読無、59 巻 4 号、

Hosei University Repository

2013、pp. 77-103

③ 濱中春、Auge und Hand in der Elektrizitätslehre. Lichtenbergische Figuren und Wissenschaftspraxis des 18. Jahrhunderts、社会志林、査読無、59巻3号、2012、pp. 17-42

④ 濱中春、Lichtenbergische Figuren und Wolken. Die Beschreibung des Unbestimmten in den Wissenschaften um 1800、社会志林、査読無、59巻2号、2012、pp. 1-25

⑤ 濱中春、„Eine neue Art der Steganographie“. Die Lichtenbergischen Figuren als Schrift- und Bildmedien、社会志林、査読無、59巻1号、2012、pp. 67-92

⑥ 濱中春、世界という書物における言葉と図像ーコメニウスとリヒテンベルクの『世界図絵』、社会志林、査読無、58巻4号、2012、pp. 27-48

〔学会発表〕(計2件)
① 濱中春、Bild-Figur-Sprache. Georg Christiph Lichtenberg und die Intermedialität in Kunst, Literatur und Wissenschaft in der zweiten Hälfte des 18. Jahrhunderts、Alexander von Humboldt-Stiftung, Netzwerktagung Hamburg、Universität Hamburg、ドイツ、2011. 11. 24

② 濱中春、Die „Lichtenbergischen Figuren“ und das visuelle Wissen von Elektrizität im 18. Jahrhundert、13th International Congress for Eighteenth Century Studies、University of Graz、オーストリア、2011. 7. 29

〔図書〕(計1件)
① ホルスト・ブレーデカンプ(原著)、濱中春(翻訳・あとがき)、法政大学出版局、ダーウィンの珊瑚、2010、185

〔産業財産権〕
○出願状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

○取得状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
濱中 春(HAMANAKA Haru)
法政大学・社会学部・准教授
研究者番号:００２９４３５６

(2)研究分担者
( )

研究者番号:

(3)連携研究者
( )

研究者番号: